



今、大切にしたいものの一つ

上越教育大学助教授 押木 秀 樹

私は、書写指導とそのための内容論・教材論を専門としており、インターネットにも関連する情報を掲載しています。それをご覧になった方から、『えんぴつで奥の細道』の流行をどう思うかというEメールをいただきました。

まず『声に出して読みたい日本語』が出版されたのは二〇〇一年、『えんぴつで…』は二〇〇六年です。いわゆるニューメディアの発達・普及の過程において、欠落していく「身体」の不安はかなり以前から述べられています。その一つのあらわれが『声に出して…』といえるでしょう。音声については比較的早い段階で着目されていたのに対し、文字に関しては「よくやく」といえそうです。コミュニケーションに関する論議においても、同様に思われます。

声に出して（文学等を）感じることもあるなら、手で書いて感じることもあるかもしれません。朗読や朗読劇のように声に出して表現することがあるなら、手で書いて表現することがあって良いのではないのでしょうか。またEメールより電話の方が、緊張感はあっても親しみが感じられますが、手

書きの手紙だと何となくうれしいというのも、同じように考えられそうです。

言語としてきちんと伝わることは必須であり、心地よくやり取りできることは大切です。その意味で「読みやすい字」「きちんとした字」を書きやすく書けることの重要性は変わらないと思います。

一方で、私たちは、字のうまい下手ばかりに気を取られていないでしょうか。手書きの文字と、身体や動作を伴わない文字とでは、感じ方も、伝わり方も異なっていることにも気をつけておきたいと思っています。

音声と文字とが並列で考えられるべきところ、文字については十分に検討されずに来ました。今、私たちがこのことをきちんと考え、伝えておかないと、大切な文化が忘れられてしまわないかと心配になります。現代、大切にすべきことはたくさんあるように思いますが、手で書くことの意識化もその一つだと思います。上越教育大学の一員として、今必要とされる教育を常に考えていきたいと思っています。